熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ
Quarterly magazine FOYER
2024 Winter
023

つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ

# FOYER

特別対談
横内謙介（劇作家・演出家 劇団「扉座」主宰）×姜尚中（熊本県立劇場館長）
特集 熊本県芸術文化祭オープニングステージ『ひこばえ』

## 天井改修工事に伴う閉館についてのお知らせ

熊本県立劇場の耐震強化のため、熊本県が実施する特定天井改修工事に伴い、下記のとおり施設を閉館する予定です。
特定天井とは、日常的に人が利用する場所にある、高さ 6m超、面積 200㎡超、質量 2kg超の吊天井のことです。
なお、工事期間中の利用受付や工事内容に関する情報・変更等は、随時ホームページにてご案内いたします。
ご利用の皆様にはたいへんご不便をおかけしますが、県立劇場をより安全に、かつ快適に提供するための工事ですので、ご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

- ■ 閉館期間　**2026年 10月 1日（木）から 2028年 2月末日まで**
  **※工事の進捗状況によっては、閉館期間を延長する場合があります。**
- ■ 停止施設　**全施設（ただし、駐車場を除く）**
- ■ 主な工事内容　**コンサートホール及びコンサートホールホワイエ、演劇ホール及び演劇ホールホワイエ、西側エントランスホール、モールの特定天井の改修 等**

特定天井改修工事に関する情報はこちら
https://www.kengeki.or.jp/ceiling-repair-work

熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

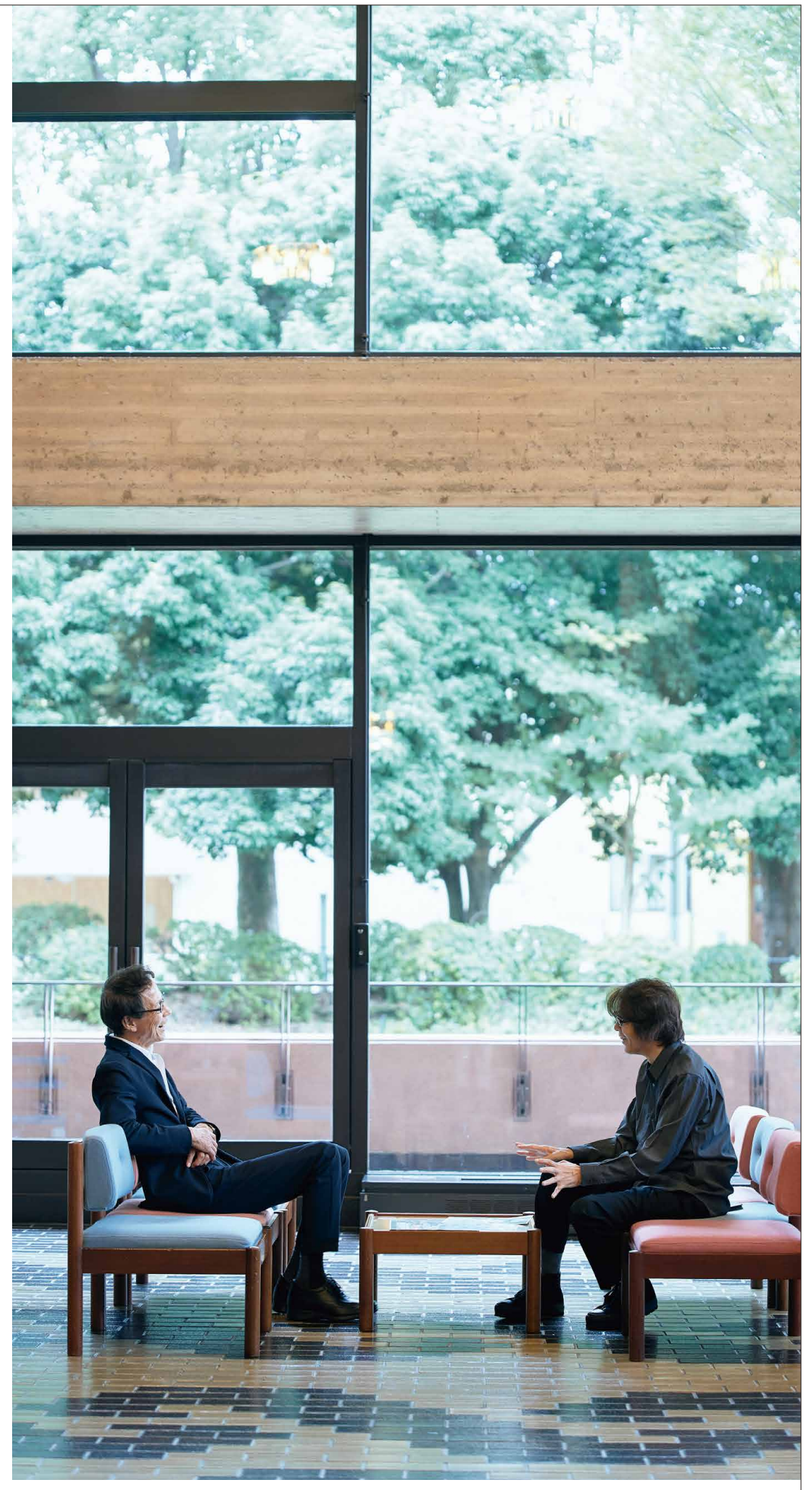
【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ　2024 Winter　発行日：2024.12.20　※掲載内容は11.30現在のものです。

Special feature　特別対談

# ローカルから、グローバルへ アジアから発信する、新たな文化芸術の挑戦



2022年11月、2日間にわたって開催した第64回熊本県芸術文化祭スペシャルステージ「ONE PIECE × 人形浄瑠璃 清和文楽『超馴鹿船出冬桜（ちょっぱあふなでのふゆざくら）』」。この公演の脚本・演出を手がけた横内謙介氏は、スーパー歌舞伎での実績をもとに、人形浄瑠璃という難題に挑みました。見事2日間の公演を成功に導いた横内氏と県立劇場の姜尚中館長が当時を振り返りながら、ローカルからグローバルへ発信する文化芸術について語り合いました。

## YOKOUCHI KENSUKE

劇作家・演出家　劇団「扉座」主宰
横内 謙介

### 伝統芸能で表現する ONE PIECE は、見たことのない景色

姜　ONE PIECEの清和文楽公演は、人形浄瑠璃と人の身体劇とが融合している様が壮観で、感動しました。

横内　お話をいただいた時に人形浄瑠璃を勉強できるいい機会だなと思って。県劇の演劇ホールではじまって、その後は清和文楽館で定期公演することが決まっていたので、県劇での公演をまずは成功させないと、という気持ちでお祭りにすることを考えました。

姜　だから熊本県内の子どもたちも含めて出演者が200人規模の舞台となった。内側から出てくるエネルギーを引き出して、舞台を盛り上げるという。

横内　清和文楽館の人たちは、自分たちの持っている宝物を人に広めていくことに慣れていないし、表現者としての至高体験をこの舞台で得てもらいたいなと。強引に富士山の頂きに連れて行くようなもので、もう詐欺師です（笑）清和の人たちも不安でしょうがなかったと思うんですよ。いろんなプロが集まる舞台で、彼らのパワーアップを図ろうっていう試みだったのですが、農業などやりながら活動している一座がよく頑張り、幕が下りた時に泣き崩れてました。

姜　横内さんは、歌舞伎で貴重な体験をされていますが、様式美を守る伝統芸能と、現代演劇との接点というのはどうつくられているのですか。

横内　伝統芸能の様式美のエッセンスは、現代にもすごく使えるものがあります。歌舞伎の時は、三代目猿之助さんから日本的な間などいろいろ学ばせてもらいました。本来は、盗んだり叩き込まれないとわからない歌舞伎文法を、論理的に説明してもらった。例えば、歌舞伎では決闘を目の前にしている後ろの侍は微動だにしない。それは、決闘している2人を際立たせるため。現代演劇ではそれはないが、歌舞伎の持つ表現なんです。それで最後に得られるものは、究極の美だという。その演出は、県劇での公演でも小さい人形に光を当てるために随分使っています。伝統芸能に触れていたからこそわかっていました。

### 型にはまった中から自由奔放なオリジナルが生まれる

横内　古典芸能は、最初に師匠のマネをしろと叩き込まれる。型にはめる。オリジナリティは要らないわけですよ。ただ、元は師匠のマネなのに、歌舞伎俳優というのは同じ演目をやっても、みんな違うわけです。逆に個性が際立ってくる。その個性を際立たせる土台が型によってしっかりしてるから、圧倒的な説得力があるのです。

姜　横内さんが歌舞伎で学んだことが、人形浄瑠璃の公演でも活かされるわけですね。

横内　人形には表情がないけれど、人形浄瑠璃の指導をした淡路人形座の人たちが操れば人形に表情が出てくる。ONE PIECEのチョッパーは、ぬいぐるみなんだけど、その顔が曇って見えたり、悲しげな背中が見えたりするわけ。型が徹底的に入っている人が操れば、オリジナルの表現も生きるんだってこと。伝統とか、自分たちが守ってきたものの可能性について、清和の人たちも気づいてくれたんじゃないかなと思います。

姜　型にはまった中から自由奔放なものが出てくるのですね。

## KANG SANG JUNG

熊本県立劇場館長　姜 尚中

横内　アジアの話になりますが、「踊るアジア」という舞台に以前取り組みました。日本、韓国、タイ、バリの舞踊家が８人集まってつくる舞台を一度トライアルでやったのです。各国全部の稽古場を見学しましたが、伝統芸能は共通していましたね。師匠がいて、この型を覚えなさいと。

姜　美術も音楽も、学校ではもはや教育になってしまっている。マスターがいて、その雰囲気とかいろんなものを学んでいくっていうのは、今はもう教育現場ではなくなっていますね。

## 音楽や演劇や芸術は薫陶を通じて伝わっていく

横内　三木のり平さんって役者がいたじゃないですか。結構可愛がってもらったんですよ。芝居のつくり方とか、演出の仕方とかいろいろ教えてもらった。のり平さんがフリースタイルも良いが、客席に届ける技を学べと言ってた。笑わせるのも名人ですけど、あんなに芝居の技を持っている人はいなかった。

姜　のり平さんは、大好きな俳優さんです。

横内　芝居って教科書にできないことが多すぎます。マニュアルの中にメンターはいないですよね。メンターとの出会いが、特に僕らの職業にとっては絶対不可欠だと思うんで。

姜　大学にもメンターになる人がいたので、薫陶を受けたっていうか。音楽や演劇や芸術は、薫陶を通じて伝わっていく。それが観客にも伝わる。横内さんのような人が、歌舞伎、人形浄瑠璃と伝統芸能を取り入れ、画期的なことが生まれた。僕は価値が生まれるのは異種混交でないとダメだと思うんですよ。同質性の中にまどろんでいる限りは新しい価値は出てこない。

横内　以前館長がおっしゃった「ローカルからグローバルへ」という言葉、あの後いろんなところで使わせていただいてて。今、清和文楽館で行われているONE PIECEの定期公演で、毎回駐車場に入りきれないぐらい車を並べてみたいですね。あそこに行って楽しむ人たちを、どれだけ惹き付ける仕掛けができるかですね。

## 演劇や芸術がないと社会的な酸欠状態になってしまう

姜　コロナ禍、劇場ができることをいろいろ考えました。劇団のような組織を抱えている人にとっては、その存続ですよね。

横内　日本で「エンターテインメントは不要不急のことで我慢してください」と言っていた一方で、ドイツの政府は「生命維持措置として真っ先に文化芸能を守る」と発表した。現場で培われた技術というのは、長くそこにいないと分からないことが多々ある。それが、このコロナ禍でずいぶん廃業した。彼らが持っていたノウハウは再度つくりあげるのに、ものすごい時間がかかる。

姜　僕もドイツの文化相のその言葉を引用したことがあります。演劇や芸術がないと、社会的な酸欠状態になって、息すらできない。社会が崩壊はしないにしても、大変なことだと。

横内　国際政治学をご専門にされていた先生が、なぜ県立劇場の館長を引き受けられたのか聞きたかったんですよ。僕にとって大きな希望なので。

姜　ひとつは、文化芸術でアジアの交流を深めるシアターアジアに取り組みたい。日本が低迷してる理由は、文化産業とか、文化国家とか、こういうところに目が向いてないからです。高付加価値化を実現できるのは文化芸術、アートしかない。日本の伝統芸能の中にそういう側面があればスポットライトを当てて、高付加価値をつくれるようにしたい。僕はこの県立劇場を預かって、アジアとの交流で文化振興をしていきたいのです。彼らとケミストリーを起こしていけば、まだまだアジアの可能性はあるんだ、と。

対談のフルバージョンは県立劇場ホームページで公開！



【県劇 NEWS】

# けんげきキッズプログラム かんげきアクティビティブック表彰式

2024年10月19日(土)　熊本県立劇場

熊本県立劇場では、大人も子どもも一緒に楽しめる演目を「けんげきキッズプログラム」と名付け、シリーズ化して展開しています。キッズプログラムシリーズの公演、ワークショップなどへの参加者には、参加した演目で感じたことや感想を絵や文章で自由に記録できる「どきどき、けんげき かんげきアクティビティブック」を配布。鑑賞したり、参加することで、どんな時間が過ごせたのか、誰かと話すきっかけづくりを提供したいと考えてこのブックを制作しています。２０２４年度から始まったこのアクティビティブックの取り組みは、３つの演目に参加したらコンプリートできます。８月に第１号が県劇に提出されました。記念すべき１人目の提出者は、熊本市内の小学校に通う緒方玲さん。アクティビティブック提出第１号としての表彰状を、玲さんにお渡しする小さなセレモニーを開催しました。セレモニーには、玲さんとお母さんの２人が出席。姜館長から表彰状と記入してもらったアクティビティブックにスタッフからのメッセージを添え、記念品とともにお渡ししました。姜館長からの「参加した３つの演目の中でおもしろかったのは？」という質問に対して、「ぜんぶ」と答えた玲さん。特に６月に開催されたダンスワークショップが印象に残っているようで、アクティビティブックには一緒にダンスを習ったお友達全員が踊っている絵が描かれていました。

９月には待望の２人目の提出があり、どんどん広がりを見せているキッズプログラムの事業。小さな出会いと大きなどきどきを提供する劇場として、今後もさまざまな企画をお届けします。

左から姜尚中館長、緒方玲さんとお母さん、宮尾尚理事長

Special feature　熊本県芸術文化祭オープニングステージ

# 県内の太鼓奏者と鼓童が示した新たな可能性

「芸術を高め、文化を広め、次世代へつなぐ」をコンセプトに、熊本県の芸術文化祭の開幕を華々しく告げる「熊本県芸術文化祭オープニングステージ」。例年、国内外で活躍するアーティストをゲストに、県民参加の舞台を創作しています。

66回目の今回は、国重要有形民俗文化財の宇土雨乞い大太鼓に焦点を当てた「和太鼓」がテーマです。県出身で太鼓芸能集団「鼓童」メンバーの前田順康さんを演出に迎え、2年間かけクリエイションしました。

オーディションで選ばれた中学生から40代の熊本県内の太鼓奏者たちと宇土雨乞い大太鼓保存会メンバー、そして鼓童メンバーが出会い、クリエイションに取り組んだこの舞台。歴史と伝統の中にある太鼓に新たな可能性を示す作品となりました。

舞台は2部構成。第1部は宇土雨乞い大太鼓フィーチャーステージ、第2部はこの舞台のための委嘱作品の世界初演です。

第1部では、宇土雨乞い大太鼓保存会選抜メンバーが鼓童のメンバーとともに、宇土で継承されてきた太鼓を交えて複数の曲を奏でていきます。太鼓が担ぎ上げられ、舞台の下手から上手にゆっくりと移動すると一気に時代をさかのぼり、まるで雨乞いの場に立ち会っているかのように客席は演奏に引き込まれていきます。

第2部では、作曲家・藤倉大さんによる「Pulsing ～パーカッショングループのための」を初演。演奏者は団扇太鼓を叩きながら客席から現れます。こういったアイデアは、作曲者の藤倉さんと前田さんがオンラインで話し合いながら生まれたものだそう。藤倉さんはこういった創造性を「鼓童らしい」と評します。楽曲は依頼した演奏時間より多めに音符が書かれ、どんな楽器で弾くか、どの部分を省略して演奏するか自由にしてよいとされています。今までにない太鼓の楽曲が県劇の舞台で誕生しました。

第1部：宇土雨乞い大太鼓フィーチャーステージより

続いて演奏された「ひこばえ」は前田さんの作品。こちらも世界初演です。「熊本」と聞いてそれぞれが思い起こす風景をコラージュし、「実際には存在しないけれど、確実に自分たちの頭の中にある熊本の姿」を音にしようと、創作が進められたそう。前田さんを中心に対称に配置される演奏者たち。力強さもありながら、太鼓が持つ従来のイメージを覆すようなやさしさを感じる楽曲でした。

前田さんは今回演出を務めた自身のことを「学級委員長のようなもの」と言います。「鼓童が何か教えるとか提案するのではなく、みんなで考えたいと思っていました」。今後は舞台「ひこばえ」が独立して、鼓童の手をどんどん離れていくことが狙いだと前田さんは話します。「このパッケージでそのまま再演するのではなく、1曲をピックアップして演奏したり、今回のために書き下ろした作品を新たなメンバーで演奏したり、コミュニケーションのきっかけになっていくことが願いです」。

本公演のタイトルにもなった「ひこばえ」とは、切り株や木の根元から新たに生えてくる若い芽のこと。太鼓という大きな歴史の流れの中で今回の参加者たちが新たな芽となり、今後の太鼓文化を牽引していきます。

第2部：藤倉大「Pulsing～パーカッショングループのための」より

## 第66回熊本県芸術文化祭 オープニングステージ「ひこばえ」

2024年9月8日(日) 14時開演 演劇ホール

第1部：宇土雨乞い大太鼓フィーチャーステージ
『呼～大太鼓～鼓行～こだま～モノクローム～大太鼓～木星』

第2部：熊本県芸術文化祭オープニングステージ委嘱作品（初演）
藤倉大『Pulsing～パーカッショングループのための』
前田順康（太鼓芸能集団 鼓童）『ひこばえ』

出演／太鼓芸能集団　鼓童〈特別ゲスト〉
　　オーディションで選抜した県内の太鼓奏者
　　宇土雨乞い大太鼓保存会選抜メンバー

参加者の声

**ネイビン・ニコラス・アカミネさん**

こうやって熊本県内の太鼓奏者が集まり、鼓童のみなさんと一緒に舞台に立てて幸せです。Pulsingは特徴のある曲なのでどんな感じになるのかなと思っていましたが、うまくいかなかったところもうまくいったところもありました。まだまだ成長できる部分がいっぱいあるので、この経験を生かして成長したいです。これまでの稽古があって、でも決して今日の公演が終わったから「ひこばえ」が終わるのではなく、これからも続いていく感じがいいなと思っています。

**坂井碧仁さん**

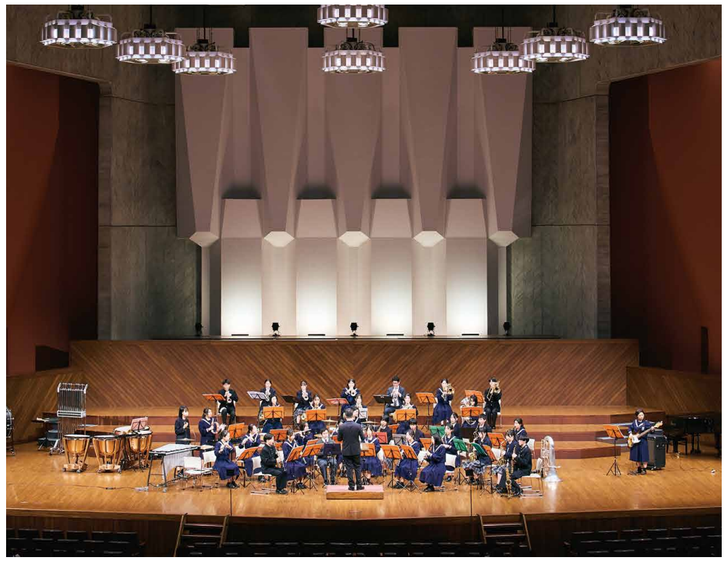
今回オーディションを受けた理由は、鼓童のみなさんと演奏したいという理由でした。見事合格して、いろんなチームの方とも一緒に交流して、同じ作品を作り上げて、ミスもなくしっかり演奏できたなと思います。楽しく演奏できました。僕は自分の所属している「和楽集団昴」で副キャプテンをしています。今回は「昴」から3人が参加しました。3人しか経験していないことを後輩に伝えて演奏に活かしてもらえたらと、自分も活かしていけたらと思っています。

※ P.10に演出・前田順康さんの寄稿を掲載しています

利用団体公演レポート

# 第69回城北地区高等学校交歓音楽会・第50回城南地区高等学校交歓音楽会 合同音楽会

2024年11月5日(火)　熊本県立劇場コンサートホール



熊本県立人吉高等学校・球磨中央高等学校合同による演奏では「ディスコ・パーティー」が披露された

みんなで集まれば大きなパワーになる。地方の高校生の音楽活動を活性化させたい。そんな熱い思いで企画されている合同音楽会が、爽やかな秋晴れの中開催されました。

熊本県の北部と南部の高校が集まり、日頃の練習の成果を披露するこの音楽会。もともとは、それぞれの地区で開催されていたものでした。長い歴史を刻んできた2つの音楽会を合同で県立劇場のコンサートホールにて開催することになったのが、2023年のこと。

コロナ禍の影響でさまざまな学校行事がなくなっていた中、2つの音楽会を合同で行うことで大きなパワーになるのでは、というアイデアから、それぞれの地区の中間地点、音楽のメッカである県立劇場での開催に踏み切ったといいます。今年で2回目となる音楽を通じた交流を大きな目的としている合同音楽会は、コンクールとはまた違う、どこかリラックスして、心から音楽を楽しもうという和気藹々の雰囲気があふれていました。職員バンドも含め、14団体のステージが披露されました。参加した熊本県立宇土高等学校の吹奏楽部部長の宮崎一樹さんは「コンクールさながらの本番の演奏もでき、他の団体の演奏も楽しめる。みんなの音楽を良くするための交流の場です」と笑顔に。主催者である熊本県高等学校文化連盟の光永幸生さんは、「学生にとってコンクールとは違うステージで県劇のステージを踏むことが良い経験」と語ります。最後には、出演者全員での合唱もあり、地方の学校の一体感と大きなパワーを感じられるステージとなりました。

熊本県立宇土高等学校 吹奏楽部 2年　宮崎 一樹さん(左)
熊本県高等学校文化連盟音楽・吹奏楽専門部長 光永 幸生さん(右)



県立劇場ギャラリー

## チェロ弾き

オシップ・ザツキン作

Ossip ZADKINE(1890−1967)
1935年 ブロンズ 63×29×33cm
©ADAGP Paris & SPDA Tokyo 2010

熊本県立劇場の館内に多数展示されているアート作品。今回は「チェロ弾き」をご紹介いたします。

ロシアに生まれフランスで活躍した近代彫刻の巨匠オシップ・ザツキンの2点の作品がエントランスホールに並んでいますが、そのうちの一つが「チェロ弾き」です。ロシア生まれのザツキンは15歳で渡英。19歳でパリに出て、ロダン風の具象彫刻から出発しましたが、パブロ・ピカソや藤田嗣治らとの交流もありキュビスト(立体派)に傾倒。「ポスト・キュビズム」と自ら名づけた簡潔な作風は、具象から抽象への架け橋として、モダンアートの歴史に大きな足跡を残しています。

「チェロ弾き」はインスピレーションを得ようと物思いにふけるチェロ奏者、あるいは音楽家・作曲家の姿を彫刻にしたもの。きっと同じように楽器を抱えて構想を練った音楽家が舞台に立つ姿を、コンサートホールの入り口で「チェロ弾き」は長年見守ってくれています。

THEATER MANNER　観劇マナー

劇場は「音楽の世界にどっぷり浸かりたい」「演劇をこころゆくまで楽しみたい」「子どもの成長を見届けたい」など、さまざまな目的で、さまざまな人が集まる場所です。みなさんが気持ち良く観劇できる環境を整えることが劇場としての役割ですが、公演にいらっしゃるみなさんにも守っていただきたい、知っていただきたいマナーがあります。このコラムでは、観劇のマナーをご紹介します。

## 小さい音でも、気になるもの 本番中の物音にご注意を

クラシックコンサート、オペラ、演劇、発表会などなど、劇場ではいろんな種類の公演が催されますが、共通するのはその公演を心から楽しみたい人が集まっていることです。舞台に集中したい時に、周りの小さな音が気になってしまうとその楽しみも半減してしまいます。小さなヒソヒソ話でも、袋や紙のカサカサっとする音でも、静かな会場内では気になるものです。咳やくしゃみなど我慢できないものはしょうがありませんが、ハンカチで音をおさえるなどの配慮を。劇場にハンカチ持参で行くのもマナーのひとつかもしれません。

おしゃべりやヒソヒソ声

咳をするときはハンカチで押さえて

飴のチリチリ音や紙や袋のカサカサ音

■個性光る県内の公共ホールをご紹介

## 荒尾総合文化センター（荒尾市）

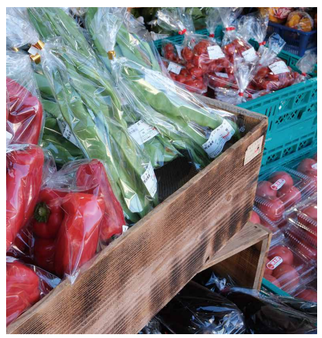
会館職員による企画の1つ「動く朗読劇」カウンティング＆クラッキングの一幕

1986年6月に開館した荒尾総合文化センター（荒尾市）は、当時の二市八町（現在の荒尾市、玉名市、南関町、長洲町、和水町、玉東町の二市四町）の広域を網羅する文化施設として誕生。館名に荒尾市の「市」が入っておらず、各市町に文化施設ができてもなお、広い地域から人が集まる文化施設となっています。開館当初から音楽、演劇分野の専門家が職員として企画・運営に入り、ステージの内製化を先駆的に進めているのが大きな特色です。現在も音楽家の佐藤さん、俳優や演出家として活動する松岡さんを中心に、職員が一丸となって企画公演をつくりあげ、地域の文化を盛り上げています。中でも小学生から高校生が在籍する「ありあけ演劇堂」の活動は、地方の文化ホールでは珍しい取り組み。年に一度のオリジナル作品の演劇公演が開かれ、そのために週に一度の練習会にメンバーは通っています。11月にはオリジナルミュージックビデオが完成しました。2024年からはエレキギター教室が開かれるようになり、今まで文化施設に通ったことのない層への広がりも見せています。

■県劇リコメンド

## 毎日が特売日の八百屋さん ベジタブルガーデン ポパイ

県劇職員のおすすめを紹介する「県劇リコメンド」。今回紹介するのは学園大通り沿いにある青果店「ベジタブルガーデンポパイ」です。ポパイは6畳ほどの店舗ですが、工夫を凝らした商品陳列でその日仕入れた沢山の野菜や果物を販売しています。11時の開店前からご近所さんが集まりだし、品物はどんどんなくなっていきます。朝に並べた品物はお昼には一度なくなるそうで、朝と同じ量の品物を追加しますが、18時の閉店頃には残っていないことがほとんど。



買い物中のお客様に「ポパイの魅力は？」と尋ねてみたところ、「鮮度と安さも魅力ですが、一番はスタッフの気配り」と教えていただきました。ポパイはご夫婦で営業されていて、奥様がレジを、ご主人が接客をされています。「このラ・フランスはもう食べごろ？」「これはどんな料理に使うといい？」などのお客様の質問に親身に答えてくれます。

県劇での観劇後に、色々な会話を楽しみながら献立を考えてみてはいかがでしょうか。

ベジタブルガーデンポパイ 大江店
熊本市中央区大江6丁目21-62
県劇から徒歩10分程度
096-240-2620
営業時間／11:00～18:00
営業日／月曜、水曜、金曜
※祝日はお休み
決済方法／現金・Pay Pay



■県劇職員が本音を綴るリレーコラム

事業グループ
井田 智子［いだ ともこ］

## 野焼きの季節

阿蘇の野焼きボランティアになって5回目の冬を迎えた。以前、川内倫子さんの写真展で米塚の野焼きの写真を見て「自分の目で見てみたい」と思ったことを覚えている。慌ただしい日々の中でそんな気持ちもすっかり忘れていたが、それから何年も経って親友夫婦の誘いでボランティアになった。

ボランティアたちは難燃性の服を着用し、消火用に最低2Lの水を背負い、防護ゴーグルや緊急用のホイッスルを身に着けて牧野の人と一緒に草原に入る。初めて野焼きに参加した日は霧がかかって視界が悪く、しばらく現地で待機をした後、天候が回復せずにそのまま解散になった。氷点下に迫る気温の中で晴れを待ちながら火を入れるはずだった草原を眺めていたとき、白い霧が何層にも重なって、その向こうに時々山肌が見えるだけなのに、きれいだなと思った自分がいた。その時、晴れだけが良い天気ではないことに初めて気が付いた。

実をいうと私は冬が苦手だった。でも、野焼きに参加してからはそこで見る景色や季節ごとに移り変わる草原の様子を通して、冬の冷たい空気も少し重たい雲も全て楽しめるようになった。今年もまた冬が来る。春を待つ準備ができる。この冬はどこに行けるのか楽しみだ。

寄稿

第66回熊本県芸術文化祭
オープニングステージ 演出
太鼓芸能集団 鼓童
前田 順康［まえだ まさやす］

## 「ひこばえ」公演を終えて

築かれてきた文脈から学び、再解釈し、いまできること、すべきことを想像する。そういう態度が、残すこと、繋ぐことだと考えています。

単に宇土の大太鼓を舞台上に持ってくるということではなく、受け継がれているお囃子を演奏するのでもなく、そこに守られてきた目に見えない雰囲気や、心を、形を変えて舞台上に表出させることが、今回の作品のミッションだと捉えて創作をしました。

ここから先の文脈を構築するのは自分たちで、この瞬間がその起点であるということを、みんなで実感することに繋がればという思いでした。

また、この舞台がなければ出会わなかった太鼓の新しい可能性を、みんなと発見するのにぴったりな機会だったと振り返っています。団体を超え、年代も様々、それぞれが強烈な個人として集まり、まっさらなところから形を、色を探りました。普段は別々のグループで活動をしている間柄ですが、新しい楽曲にいろいろな角度からのアプローチを持ち込み、創り上げる時間を過ごしました。

あの日の場と時間が、ご来場のみなさん、参加してくれたみんな、そして、自分自身のこれからの日々の色彩を変えることになれば、それが芸術の、劇場の意味だと考えます。